

# 博士人材のキャリアパス多様化を考える 上で理解しておきたいギャップとは



Chizu SEKINE **関根千津** 株式会社住化技術情報センター

## はじめに

博士人材問題は相変わらずホットな話題で、本誌においても頻繁に取り上げられており、関連したイベントがCSJ化学フェスタを含め通年で開催されている。しかし時折耳にするのが、修士1年生が修了後の進路選択肢に意図せずに博士課程進学を含めていないという話。騒いでいるのは我々大人だけなのかと思うこともしばしばだ。

日本における博士学生への支援は拡充が図られてきている。大学の研究力低下の一因として博士課程進学者の減少が指摘され、政府、文部科学省は本腰を入れて支援強化を始めている。奨学金の給付対象人数の増大を中心とした経済支援や、博士人材を採用した企業への税制優遇など、学生の博士課程進学の後押しをしている。各大学も独自の博士学生の支援に取り組み、大学間のネットワークによる活動もある。化学領域では業界団体が従前より博士人材育成に努めている<sup>1)</sup>。このように、博士学生の研究・生活環境が少しずつ整ってきており、後は博士課程進学者が増えるのを待つばかりのはずであるが、状況が好転しないのはいかとの漠然とした思いが根強くあるようである。

## 目に見えない問題に取り組んでいるのか

日本の理工系修士学生の進路決定に関するNISTEPによる意識調査では、博士課程進学をしない上位の理由は10年以上変わらない<sup>2,3)</sup>。理由のトップである経済支援不足については様々な施策が始まったが、社会に出て仕事がしたい、博士は就職が心配、企業の待遇は修士卒と変わらないとの理由については対応が十分ではない。企業就職については分野により状況が異なる。化学分野では少なくとも大企業は博士人材を従前より継続的に採用しており、採用意欲は今後高まっていく見込みである。しかしそのような情報が学生らに十分伝わっていないためか、学生や一部の大学教員の認識と実態に乖離がある。また、企業における博士号

取得者の待遇は、生涯年収で比較すると修士課程修了者よりもかなり高いとのデータがあるが<sup>4)</sup>、初任給だけを比較して博士課程修了者と修士課程修了者では余り変わらないという見方が定着し、博士課程進学に対するネガティブイメージを強調している。このように実態と状況認識にずれがあり、そのギャップという目に見えないものが博士課程進学を躊躇させていないだろうか。このような思いから、日本学術会議化学委員会では、学生の生の声に寄り添い、このギャップを少しでも埋めるべく独自の意識調査を実施し、その結果を基にした施策案をとりまとめて見解を発出した。調査結果には、例えば、博士の年収が修士よりも有意に高いデータを含めて、広く流布されている情報とは少し違った非常に興味深い結果が得られている。本誌の論説<sup>5)</sup>でも一部紹介をしているが、日本学術会議のウェブサイトから見解を閲覧してほしい<sup>6)</sup>。

もう1つ対策が必要と思われる目に見えない問題がある。現在日本の博士はアカデミアに極端に偏在しており<sup>7)</sup>、この比率を企業にシフトするなど博士人材のキャリアパスの多様化を推進しようとしている。しかし、そもそもなぜアカデミアに博士人材が偏在しているのか？企業が博士人材を採用しないから、というのは問題の裏返しに過ぎない。気になるのは、博士課程学生が企業に就職することを良しとしない風潮がアカデミアに残ってはいないだろうか、ということである。このような問いを大学教員に尋ねると、否定の返事が返ってくる。しかし、あからさまな言動がなかったとしても、そのような雰囲気や過去の風土が残っていたりすれば、それを感じ取り影響を受ける学生は少なくないかもしれない。例えば、文部科学省AirBridgeが関わったイベントアンケート<sup>8)</sup>に、『「アカデミアから離れること＝負け」，“逃げ”，“ドロップアウト”』といったような風潮もあるようです。皆さんはどう思いますか？』という質問に対して、「強く感じる」、「感じることもある」との回答が49.1%もあった事実は真摯に受け止めるべきである。この風潮を変えていかな

いと、博士人材のキャリアパスの多様化は進まないのではないだろうか。

### “研究に固執”しがちな博士たち

大学院、特に博士課程は研究者になるためのコースと一般的に認識されていることもあり、研究職こそが博士人材が就くべき職という前提で教育がなされていないだろうか。2023年9月にNHKで放送された日曜討論「どうする“研究力低下” これからの大学は」の中でも、大学はどうしても研究が1番上で、それ以外の職務が2番手の位置づけになりがちところが問題である、と出演者が指摘している。つまりこのような意識が、“博士=研究”を強め過ぎ、博士人材のキャリアの幅を狭めることにつながっているのではという気がしてならない。また2022年11月に日本学術会議化学委員会で開催した博士人材に関するシンポジウムの講演で「入社面接で博士学生が学生時代の研究テーマにこだわり過ぎるケースがある」との話が出た<sup>9)</sup>。博士人材を積極的に採用し、社員の博士号取得も後押しする企業での話であるが、要はたかだか数年しか取り組んでいない研究を企業で一生続けることは難しく、旧来イメージされている「専門分野に特化しただけ」の博士ではビジネス界で活躍することは難しい、という指摘である。

筆者は大学教員から時々「卒業生が就職先で営業に回された」、「工場に飛ばされた」などという表現を耳にするが、とんでもない誤解である。モノやサービスを売る企業にとって営業は要の1つであり、何かのミスで製造ラインが止まれば、その損失ははかりしれない製造業では、工場に配属されるにはそれなりの能力レベルがあると認識されてのことであろう。営業にしても工場にしても、ルーティンワークではなく、日々変わる状況に柔軟に対応し、クリエイティブに考えコミュニケーション力で人を動かす仕事の仕方が求められるもので、希望しても簡単に配属してもらえないわけではない。さらに、博士社員の活躍の場は事業企画や経営企画など、本社機能にも多々ある。このような部署での経験をもつ技術者は大きく成長し、その後研究所に戻って、より有能な研究員や研究マネージャーになるものである。大学教員は研究しか知らないのが指導ができないのだ、という話もあるが、指導する必要はなく、学生のキャリアパスを狭めることが起きないようにするだけで十分である。

不思議なことに、博士課程進学を増やすイベントで講演する人々が話す内容は、ほとんど「研究のすばらしさ」や「自分の研究経験」ばかりのことが多い。研

究のすばらしさを伝えたいのだからと思うが、そもそも学生が博士進学をしないのは、研究のすばらしさがわからないからではない。それは各種の意識調査でも明らかになっている。にもかかわらずそんなことばかりを話しては、研究以外の職を選択肢から外してしまう学生が育ってしまっても不思議ではない。筆者はこのあたりにも大きな問題があると思っている。

### 新規事業開発、研究・技術開発～事業接続の模索

今、新規事業の創成・開拓に力を入れている企業が多く、特に製造業は「研究開発拠点からの事業創出」、「研究開発の常識を超えた事業開発」、「研究所が投じた新事業の一手」といった文言がタイトルに含まれるセミナーが大盛況である。ゼロからイチを創る技術系人材が強く求められている証左と言えるが、これは研究分野に限られたことではない。博士課程を修了した技術系人材が企業に就職した際は、最初は研究所に配属されることが多いが、それは特に博士人材は企業内の特定の研究業務に必要な人材として採用されるケースが多いことによる。博士人材が事業関連業務を志望しながら、結局研究に配属されたという例もあるが、企業では博士に限らず最初の配属が志望どおりではないことはままある。筆者の知る限りでは、博士卒が研究ではなく事業部系に最初に配属された例もある。

いずれにしても、博士人材を研究職に限定的に考えることから解放することが、今行われている、あるいはこれから行われようとしている経済支援や教育プログラム、産学連携による人材育成に実のある成果をもたらすための必須のピースであり、博士人材のキャリアパスの多様化を促すことにつながると申し上げたい。

- 1) 化学人材育成プログラム (一般社団法人日本化学工業協会). [https://www.nikkakyo.org/Jinzai\\_ikuseiProg/](https://www.nikkakyo.org/Jinzai_ikuseiProg/)
- 2) 日本の理工系修士学生の進路決定に関する意識調査(文部科学省科学技術・学術政策研究所, 2009年3月).
- 3) 修士課程(6年制学科を含む)在籍者を起点とした追跡調査(文部科学省科学技術・学術政策研究所, 2021年6月).
- 4) 島 一則, 藤村正司, 大卒・大学院卒者の所得関数分析—大学教育経験・学習有効性認識・自己学習投資に注目して—, 大学経営政策研究第4号(2014年3月).
- 5) 茶谷直人, 西村君平, 化学と工業 **2023**, 76, 299.
- 6) 見解 日本の社会・産業をリードする化学系博士人材の育成支援と環境整備, 日本学術会議・化学委員会, **2023**.
- 7) 文部科学省 科学技術・学術政策研究所, 科学技術指標, **2020**.
- 8) 日本分子生物学会キャリアパス委員会主催ランチタイムセミナー 2021「文科省・若手官僚も申す! ~AirBridgeと考える博士号の価値と活かし方~」アンケート結果. <https://www.mbsj.jp/admins/committee/careerpath/doc/2021/2021cp2.pdf>
- 9) 平井良典, 化学と工業 **2023**, 76, 175.

© 2024 The Chemical Society of Japan

ここに載せた論説は、日本化学会の論説委員会が依頼した執筆者によるもので、文責は基本的には執筆者にあります。日本化学会では、この内容が当会にとって重要な意見として掲載するものです。ご意見、ご感想を下記へお寄せ下さい。  
論説委員会 E-mail: [ronsetsu@chemistry.or.jp](mailto:ronsetsu@chemistry.or.jp)